



TITLE:

京大広報 No. 610

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 610. 京大広報 2006, 610: 2105-2120

ISSUE DATE:

2006-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/196484>

RIGHT:



京大広報

No. 610

2006. 3



総合博物館特別展「火星の素顔—Mars Expressがとらえた3次元画像—」会場の様子
—関連記事 本文2119ページ—

目次

〈大学の動き〉

- バンドン工科大学との学術交流……………2106
- 総長主催「外国人研究者との交歓会」の開催
……………2106
- 山内 溥氏から新病棟建設費の寄附……………2106
- 平成18年度「教員研修モデルカリキュラム
開発プログラム」の採択結果……………2107
- 部局長の交替……………2107
- 平成18年度入学者選抜学力試験の第1段階
選抜状況……………2108

〈部局の動き〉

- 宇治地区一構内車両入出構方法の変更……………2109
- 4月1日より医学部附属病院敷地内が
全面禁煙に……………2110
- 敷地内禁煙に向けた講演会を実施……………2110

〈寸言〉

- わが「まち」京都 松本 修……………2111

〈随想〉

- イヤーズプレート 名誉教授 向山 毅……………2112

〈洛書〉

- あの世とこの世の道理 橘 邦英……………2113

〈訃報〉

- ……………2114

〈日誌〉

- ……………2116

〈話題〉

- アスベスト問題・京都シンポジウム～もう一歩
ふみこんで、知り、学び、考える～の開催……………2117
- 医学部附属病院で「きさらぎコンサート」
を開催……………2118
- 京都地域留学生交流推進協議会総会を開催……………2118

〈お知らせ〉

- 総合博物館特別展……………2119
- 原子炉実験所一般公開……………2119
- フィールド科学教育研究センター上賀茂試験地
春の一般公開 自然観察会……………2120

〈編集後記〉

- ……………2120

京都大学広報委員会

<http://www.kyoto-u.ac.jp/>

大学の動き

バンドン工科大学との学術交流

本学とインドネシアのバンドン工科大学は、大学間学術交流協定の締結について協議を重ねてきたが、このたび本学と同大学の教育・研究の交流と協力を推進するための「学術交流に関する一般的覚書」を交換した。

バンドン工科大学との「覚書」は、本学尾池和夫総長とバンドン工科大学 Djoko Santoso 学長の署名

により、1月20日（金）に交換された。

同大学は1959年に創設され、生命科学工学部・電子情報工学部・薬学部等の10学部、および大学院1専攻を有する理工系大学。教職員数は1,300人。学部生は12,000人。院生は3,500人。ホームページは <http://www.itb.ac.id/en/>

総長主催「外国人研究者との交歓会」の開催

総長主催の「外国人研究者との交歓会」が1月31日（火）に時計台記念館国際交流ホールにおいて開催された。この交歓会は、本学において教育、研究に従事している外国人研究者と、総長をはじめとする本学関係教員とが交流を深めることを目的に毎年開催されているもので、今年度も約300人が出

席する盛大なものであった。交歓会では、尾池和夫総長からの挨拶の後、外国人研究者を代表して総合博物館の Kyle N. Armstrong 教授から挨拶があり、横山俊夫副学長の乾杯の発声の後には、談笑の輪が広がり、盛会のうちに閉会した。



外国人研究者を代表して挨拶する Armstrong 教授



尾池総長夫妻を囲んで歓談する外国人研究者

山内 溥氏から新病棟建設費の寄附

本学は山内^{ひろし} 溥氏（任天堂株式会社相談役）から「京大病院にふさわしい病棟を建ててほしい」と私財70億円の寄附を受け、附属病院の新病棟を建設することについて、2月21日（火）山内氏と合意した。

病棟に関しては、一部病棟の老朽化や分散という問題があり、患者の利便性等の向上から新病棟の整

備とともに病棟の一元化を図る構想を検討していた。

このたび、山内氏からの寄附を受けて建設する新病棟は、この構想実現の一步として、患者アメニティを重視した高度先進医療・最先端医療を实践するための適切な環境を提供するものとなる。

建物概要

病 床 数	300床程度
階 数	地下1階 地上8階
延床面積	20,000平方メートル程度
構 造	鉄筋コンクリート造
工 期	着工 平成19年2月頃 竣工 平成20年12月頃
稼 働	平成21年度予定



新病棟完成予想図

平成18年度「教員研修モデルカリキュラム開発プログラム」の採択結果

独立行政法人教員研修センター「教員研修モデルカリキュラム開発プログラム」は、「10年経験者研修」および「今日的な教育上の重要課題に関する研修」について、大学と教育委員会等の協力によりモデルカリキュラムを開発し、そのモデルカリキュラムを参考例として提示することにより、全国の教育委員会が実施する研修の充実を図ることを目的とした新規事業である。

本学からは、「教育課題研修モデルカリキュラム開発プログラム」に教育学研究科が京都市教育委員会との連携による「ワークショップ型研修とe

フォーラム構築によるスクール・リーダーの育成」を申請し、採択された。

教育学研究科のプログラムは、学校改善、カリキュラム・マネジメント、カリキュラム設計に焦点化した「スクール・リーダー育成研修」をワークショップ形式で行い、受講者の実践の情報を共有・蓄積するシステムをインターネット上に構築するというものである。

「教員研修モデルカリキュラム開発プログラム」についての教員研修センターホームページ

http://www.nctd.go.jp/PDF/h18_p_kekka_1.pdf

部 局 名	連携教育委員会名	プログラム名
教育学研究科	京都市教育委員会	ワークショップ型研修とeフォーラム構築によるスクール・リーダーの育成

部局長の交替 (新任)

大学院情報学研究科長

富田 眞治情報学研究科教
授（通信情報システム専攻コ
ンピュータ工学講座担当（計
算機アーキテクチャ、並列処
理））が、船越満明情報学研究
科長の後任として、3月1日付けで任命された。任
期は平成20年2月29日まで。



平成18年度入学者選抜学力試験の第1段階選抜状況

平成18年度入学者選抜学力試験の第1段階選抜が行われ、2月13日(月)、選抜結果が志願者に通知された。
学部別の合格者は次表のとおりである。

学 部			募集人員	志願者数	倍 率	第1段階選抜		第1段階選抜 の予告倍率
						合格者数	倍 率	
総合人間学部	前期 文系	期	105 [△]	378 [△]	3.6 [※]	372 [△]	3.5 [※]	—
		系	55	198	3.6	194	3.5	(注1)
		系	50	180	3.6	178	3.6	(注2)
	後期	期	15	257	17.1	240	16.0	約12.0倍
文学部	前期	期	190	577	3.0	573	3.0	約3.5倍
	後期	期	30	385	12.8	300	10.0	約5.0倍
教育学部	前期	期	40	164	4.1	163	4.1	約3.5倍
	後期	期	20	174	8.7	152	7.6	約5.0倍
法学部	前期	期	300	886	3.0	882	2.9	約3.5倍
	後期	期	10	419	41.9	290	29.0	約8.0倍
経済学部	前期 一般論	期	210	784	3.7	750	3.6	—
		般	160	503	3.1	500	3.1	約3.5倍
		文	50	281	5.6	250	5.0	約5.0倍
	後期	期	20	704	35.2	570	28.5	約7.0倍
理学部	前期	期	280	857	3.1	838	3.0	(注3)
	後期	期	31	878	28.3	865	27.9	(注4)
医学部	前期	期	213	618	2.9	550	2.6	—
		期	30	338	11.3	292	9.7	—
	医学科	前期	90	344	3.8	278	3.1	約3.0倍
		後期	10	155	15.5	110	11.0	約10.0倍
	保健学科	前期	123	274	2.2	272	2.2	—
		後期	20	183	9.2	182	9.1	—
	看護学専攻	前期	63	142	2.3	141	2.2	約5.0倍
		後期	7	80	11.4	80	11.4	約10.0倍
	検査技術専攻	前期	30	77	2.6	77	2.6	約5.0倍
		後期	7	53	7.6	53	7.6	約10.0倍
	理学療法専攻	前期	15	39	2.6	38	2.5	約5.0倍
		後期	3	25	8.3	24	8.0	約10.0倍
	作業療法専攻	前期	15	16	1.1	16	1.1	約5.0倍
		後期	3	25	8.3	25	8.3	約10.0倍
薬学部	前期	期	70	184	2.6	183	2.6	—
		後期	10	131	13.1	131	13.1	—
	薬科学科	前期	44	114	2.6	113	2.6	約3.5倍
		後期	6	74	12.3	74	12.3	約10.0倍
	薬学科	前期	26	70	2.7	70	2.7	約3.5倍
		後期	4	57	14.3	57	14.3	約10.0倍
工学部	前期	期	857	2224	2.6	2218	2.6	約3.0倍
		後期	98	988	10.1	832	8.5	—
	地球工学科	前期	166	465	2.8	465	2.8	—
		後期	19	248	13.1	228	12.0	約12.0倍
	建築学科	前期	72	238	3.3	237	3.3	—
		後期	8	117	14.6	80	10.0	約10.0倍
	物理工学科	前期	211	492	2.3	492	2.3	—
		後期	24	214	8.9	192	8.0	約8.0倍
	電気電子工学科	前期	117	326	2.8	325	2.8	—
		後期	13	123	9.5	92	7.1	約7.0倍
	情報学科	前期	81	240	3.0	237	2.9	—
		後期	9	97	10.8	90	10.0	約10.0倍
	工業化学科	前期	210	463	2.2	462	2.2	—
		後期	25	189	7.6	150	6.0	約6.0倍
農学部	前期	期	233	581	2.5	578	2.5	約3.5倍
		後期	67	719	10.7	718	10.7	—
	後期	資源生物科学科	19	168	8.8	168	8.8	約10.0倍
		応用生命科学科	9	119	13.2	119	13.2	約10.0倍
		地域環境工学科	11	141	12.8	141	12.8	約10.0倍
		食料・環境経済学科	9	110	12.2	110	12.2	約10.0倍
		森林科学科	12	129	10.8	128	10.7	約10.0倍
		食品生物科学科	7	52	7.4	52	7.4	約5.0倍
		計	2829	12246	4.3	11497	4.1	—
合 計	前期	期	2498	7253	2.9	7107	2.8	—
		後期	331	4993	15.1	4390	13.3	—

- (注1) 総合人間学部前期(文系)は、大学入試センター試験の5教科6科目の素点(英語は筆記のみ)が800点満点中550点以上の者を第1段階選抜合格者とする。
- (注2) 総合人間学部前期(理系)は、大学入試センター試験の5教科7科目の素点(英語は筆記のみ)が900点満点中620点以上の者を第1段階選抜合格者とする。
- (注3) 理学部前期は、大学入試センター試験の5教科7科目の素点(英語は250点満点を200点満点に換算)が900点満点中600点以上の者を第1段階選抜合格者とする。
- (注4) 理学部後期は、大学入試センター試験の3教科3科目の素点(英語は250点満点を200点満点に換算)が500点満点中300点以上の者を第1段階選抜合格者とする。
- 備考 下記外国学校出身者のための選考の最終合格者が募集人員に満たない場合には、その不足数を法学部(後期)10名、経済学部(後期)20名の募集人員に加える。

〔外国学校出身者のための第1次選考実施状況(外数)〕

学部名	募集人員	志願者数(倍率)	第1次選考合格者(倍率)
法 学 部	20人以内	41人(2.1倍)	23人(1.2倍)
経 済 学 部	10人以内	26人(2.6倍)	16人(1.6倍)

部局の動き

宇治地区一構内車両入出構方法の変更

宇治地区構内車両入出構方法が変更になった。

宇治地区では歩行者の安全確保と正門での車両入構手続きによる混雑緩和を図り、入構に際して歩行者と車両を分離するため、1月23日(月)より入構方法を右のとおり変更した。

1. 平日の午前8時から午後5時の間、すべての車両(バイクを含む。)は、南門から入構する。
2. 出構は正門からとする。
3. 上記以外の時間及び土日、休日は南門を閉鎖し正門からのみ入出構する。



4月1日より医学部附属病院敷地内が全面禁煙に

喫煙が健康に及ぼす影響は大きく、咽頭ガン、肺ガンなどの多くのガンや呼吸器疾患・循環器疾患・妊娠合併症などの病気を惹起する重大な要素と指摘されている。

また、喫煙者だけではなく、その周囲の人に対しても受動喫煙により同様に健康被害を及ぼすことから、平成15年5月「健康増進法」が制定され、多くの人が利用する施設、学校、病院等の管理者は施設

利用者に対して受動喫煙防止策を取るように義務付けられている。

医学部附属病院においても、タバコの自動販売機の撤去、分煙、建物内禁煙と対策を進めてきたが、患者のみなさまの健康をサポートするという病院の社会的使命から、これを一步進めて敷地内全面禁煙を4月1日より実施することになった。

敷地内禁煙に向けた講演会を実施

医学部附属病院では、4月1日より敷地内禁煙を実施するにあたり、職員に対して禁煙サポートを行うため、「大学病院における禁煙化」と題した講演会を2月9日（木）に実施した。

この講演をとおして、たばこを吸うことによる健康被害、受動喫煙の正しい知識への理解をもってもらうため、禁煙サポートの権威でもある奈良女子大学 高橋裕子 保健管理センター長（本院総合診療科の「禁煙外来」担当でもある）を招いた。

当日は、患者さんと接する医師や看護師を中心に80名余りが集まり、講師の話すひとこと一言に熱心に聞き入っていた。

特に、講師からは病院本来の社会的使命を果たすべく、「京大病院」が敷地内禁煙を成功させ他の病院にも波及を期待する旨のお話があった。また、敷地内禁煙を実施した病院を例に挙げられ、禁煙ポス

ターを作製し人の目に付く至るところに張り紙をすること、院内の巡回を行うこと等、禁煙を成功させるための秘訣を伝授された。

終了後、喫煙者に対しては個別に指導があり、インターネットを通したホームページ「禁煙マラソン」を紹介、また、禁煙パッチを配布して禁煙指導にあたった。



講演される高橋裕子先生

松本 修

随想

イヤーズプレート

名誉教授 向山 毅

自宅の居間の壁にハンガリーのヘレンド製のイヤーズプレートという干支の絵を描いた陶器の皿が飾ってある。グリーンの色で描かれた干支の動物たちは馴染みのある日本のものとはどこか違った形や



表情をしていて面白い。毎年一枚ずつその年の干支が描かれたものを購入したもので、最初の皿は1996年のネズミである。このイヤーズプレートを集めるきっかけとなったのは阪神大震災であった。

1995年の1月17日早朝、神戸市須磨区の自宅で眠っていた私は震度7強の激しい縦揺れで飛び起きた。家が傾いていたために玄関の扉が開かず、妻と娘の三人で窓から外に出た。そのときに目にした光景に驚いた。何軒もの家が瓦礫の山になっており、道路は倒れた塀でふさがれている。私は家から出るときにガラスで足を切ったが、三人とも大した怪我がなかったのは幸いであった。近くの外国人学校の体育館に避難したが、校門を入ったところで外国人の教員の家族が温かいスープを用意してくれていたのには感激した。あらためて災害時におけるキリスト教の活動に驚いた次第である。三日後に研究室の人たちが福知山を経由して迎えに来てくれ、枚方の公務員住宅に移ることができた。

一ヵ月後にやっとJRの線路が一部を除き復活して、全壊と判定された自宅を取り壊すために戻った神戸の街はすっかり形を変えていた。地震の直後は自宅の近所の様子しか知らなかったが、途中で目にした傾いた電柱、倒壊したビル、壊れた家や瓦礫の山などよく知っていた街だけにその被害の大きさにショックを受けた。多くの知人が地震で、またその後遺症で亡くなっている。市内に一般車両が入れなかったで、自宅を整理したあとは最低限に必要なものしか持ち出さなかった。

震災のあとに感じたのは、これまで如何に無駄な生活をしてきたかを自覚していなかったことです。必ずしも必要でない物を沢山購入し、多くの時間を無為に過ごしていました。自然は災害という形でこれまで私がなんとなく価値があると考えてきたものが必ずしも重要ではなく、本当に大切なものは何かを教えてくれたような気がします。また亡くなられた多くの人々のためにも、幸いにも生き残った私たちは充実した生活を送るよう努力する必要があると思いました。

その年の秋に妻が偶然に雑誌で翌年の干支を描いたヘレンド焼のプレートが発売されるという広告を見つけた。以前にハンガリーに行ったときにヘレンドの陶器に魅せられ、コーヒカップ、皿、小さな置物などを購入したことがあったが今度の震災で多くのものが壊れてしまっていた。私たちはもう陶器など壊れやすいものは買わないでおこうと話していたのだが、このプレートは震災のことを忘れないように、また私たちの新しい出発を記念して購入することに決めた。二年後にやっと元の場所に家を再建した時に、居間の壁に二枚のイヤーズプレートを掛けて新しい門出を祝ったのである。このようにして集め始めたイヤーズプレートであるので、その枚数が震災後に経過した年数を表していることになる。

今では11枚のプレートが壁に掛かっている。来年になって12枚目のイノシシを飾るとちょうど干支が一回りして、全ての種類の動物が揃うことになる。そう思いながらあたりを見回してみると部屋の中にずいぶんといろんな物が増えているようだ。震災の後にはもう何もいらないと思ったのだが、年月が過ぎるにつれてまた元に戻ってしまったように思われる。震災はもう遠い前のことのような気がしていたのだが、自宅の近くにはまだ空き地も多い。イヤーズプレートが一通り揃うときに、あらためて震災直後の気持ちにもどって人生を考えてみる必要がある気がしている。

(むこやま たけし 元化学研究所教授 平成12年退官、専門は原子物理学)

洛書

あの世とこの世の道理

橘 邦英

電気・電子技術が生み出した多くの製品が人類の生活や、延いては“文化”までも大きく変えてきた。この四半世紀の間でも、パソコンや情報通信、携帯電話、薄型TVなどが日常生活に不可欠なものとなっている。そのような状況でありながら、最近の大学入試では何故か電気・情報系の学科の人気の下降傾向が見られる。その理由を分析してみると、現代社会の風潮と深く関わっている。

つまり、それらの便利で高機能な製品は今日ではあって当り前の、いわば米か空気のような存在になってしまっている。特に多くの若者が、技術の中身を全く理解していなくても、巧みにインターネットやケータイを使いこなしたり、そのハードウェアとしての電子機器がバナナの叩き売りのごとく安価で売られ、ときには無料で提供されたりしているのを見るにつけて、価値観の歪が強く感じられる。

この状況を何とか打開しなければということで、いささか古めかしく感じられる“電気電子工学科”という名称を、現代風で夢のあるものにできないかと関係者の間で相談し始めているが、なかなか妙案は出てこない。

そもそも、電気の“電”の語源を辞書で調べてみると、下の部分は“申”を意味し、雨（雲）の中から長く伸びるもの、つまり稲妻を表しているのだそうだ。“気”の方は、天気や精気、雰囲気などの言葉からたやすく想像できるように、何かの影響が及んでいる領域とその効果を含めて表す、“場”あるいは“界”といった意味をもっている。その2つを合わせた“電気”という言葉から、学問の意味合いが醸し出される実に旨い名称である。

一方、英語での電気の語源は“琥珀”ということである。紀元前600年頃のギリシャの哲学者 Thales が、琥珀を擦ったときに物を引きつける不思議な現象に対して、琥珀を意味する“ $\eta\lambda\epsilon\kappa\tau\rho\nu$ ”という文字を当てたことに由来する。以来、2000年も経った16世紀半ばになって Gilbert が摩擦現象を科学的に研究し、*electricity* という言葉を初めて用いたとされている。その後、クーロンの法則や電磁誘導現象の



発見をふまえて、19世紀に Maxwell が電気と磁気を融合した電磁気学として体系化し、さらに20世紀には量子力学を取り入れて今日の電気電子工学の基盤が構築されている。

さて、人気低迷の原因の話に戻るが、電気のように直接目に見えないものを対象とする学理を修得するには、論理的な思考を積み重ねていくことが要求される。しかし、今日のハイテンポで表層的な日常の中では、そのような面倒なことは避けて通るような風潮になってしまっている。このことが最大の要因であると思われる。

一般に電気の世界では、実時間に対して周波数、あるいは結晶中の電子のように、実空間での位置に対して波数（運動量）というような、互いにフーリエ変換で関係づけられる座標空間を行き来してものを考えることが多い。その運動量の座標で表される空間とは、概念的に言えば、目を瞑って走り回るときに速度だけを感じるような世界に例えられるであろう。ところで、“色即是空、空即是色”と説く般若心経では、この世とあの世の関係を色と空で表現しているという解釈もある。つまり、二つの世界を互いにフーリエ変換で結ばれた表裏の関係と考えればわかりやすい。このように電気の世界に深く入り込むためには、あの世での思考を楽しむような柔軟性が必要である。

そのような屁理屈でいくと、目に見える物の道理を追求する狭義の“物理”に対して、目に見えない電磁気現象を基礎とした科学を“電理”と名づけてもよいかも知れない。かたや、数学を基礎とした“数理”という科学もある。そこで、物理工学の向うを張るわけではないが、“電理工学”という学科名もあり得るように思えてくる。ちなみに、今では電子工学という名称に違和感をもつ人はいないが、かつて本学が日本で最初の電子工学科を文部省に申請したときに、当時の役人が電子工学とは何をする学問かと訝ったという話も伝わっている。

名称論議はともかく、“見えないものが観えたときの悦び”が実感できる教育を通して、最新の車やロボットにおける脳や神経の機能を担っている電気電子科学の世界で、再び若い好奇心を喚起できないものかと、つれづれならぬせかせかとした時の流れの中で夢想している。

（たちばな く に ひ で 大学院工学研究科電子工学専攻教授、専門はプラズマ物性工学）

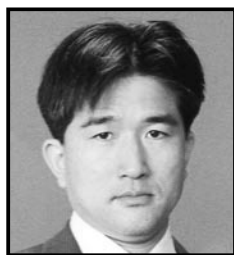
訃報

このたび、^{ふくせ たつお}福瀬達郎医学研究科助教授、^{まん い まさんど}万井正人名誉教授、^{たかはし ひでなお}高橋秀直文学研究科助教授、^{にし ともた}西 朋太名誉教授、^{かつらやま こうすけ}桂 山幸典名誉教授が逝去されました。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

以下に各氏の略歴、業績等を紹介します。

福瀬 達郎 医学研究科助教授



福瀬達郎先生は、平成17年12月27日逝去された。享年44。

先生は、昭和60年京都大学医学部を卒業、同年京都大学胸部疾患研究所外科に入局

後、関西電力病院呼吸器科、倉敷中央病院呼吸器科に勤務、平成2年京都大学大学院医学研究科博士課程入学、同6年に修了し、医学博士号を授与された。平成4年にドイツ国・ハノーファー医科大学胸部心臓血管外科学教室にresearch fellowとして留学、同6年 京都大学胸部疾患研究所胸部外科助手、同12年 大津赤十字病院呼吸器科部長を経て、同15年

京都大学医学部呼吸器外科講師、同17年10月同助教授に就任された。専門は肺移植、肺癌外科治療。肺移植における臓器保存・虚血再還流傷害をテーマとした研究、京都大学臨床肺移植の中心メンバーとして活躍。最近は、心停止後ドナー肺移植の実現のため、スウェーデン、ベルギーの肺移植施設との共同研究を精力的に進めていた。肺癌治療においては胸腔鏡手術の普及に尽力され、またラジオ波腫瘍焼灼術（RFA）、Nuss 法といった新しい外科手術にも積極的に取り組まれていた。

（大学院医学研究科）

万井 正人 名誉教授



万井正人先生は、1月4日逝去された。享年85。

先生は、昭和19年京都帝国大学医学部医学科を卒業、京都大学医学部副手、大阪医科大学、龍谷大学、皇学館大学の講師、助教授を経て、

昭和38年京都大学教養部助教授、同43年教授に就任された。昭和51年より京都大学体育指導センター所長を併任、同59年停年退官後、名誉教授の称号を受けられた。本学退官後は、大阪産業大学教授、同大学保健管理センター所長、同大学理事を兼任、平成3年定年退職後も1年間同大学の要請により特任教

員として教育と後進の育成に努めるとともに、研究活動が続けられた。

先生の研究分野は、運動生理学、応用生理学、人間工学におよぶが、作業能率および安全性の向上、疲労の判定と予防並びに回復、アンチエイジング等に関するものが主流をなしている。その研究姿勢は、いつも斬新な独自の研究手法を開発していく気風が随所に見られ、運動生理学において新しい研究分野を多数開拓した功績は誠に大である。

これら一連の功績により平成6年11月に勲三等瑞宝章を受けられた。

（大学院人間・環境学研究科）

高橋 秀直 文学研究科助教授



高橋秀直先生は、1月22日逝去された。享年51。

先生は、昭和53年京都大学文学部史学科を卒業、同55年同大学大学院修士課程修了、同58年同大学院博士課程単位取得退学の後、同大学における研究従事を経て、平成元年に神戸商科大学助教授となり、同5年に博士号請求論文『日本近代化と朝鮮問題』を提出し、京都大学から博士号を授与された。平成7年に京都大学文学部助教授に就任し、同8年に大学院文学研究科助教授に配置換えとなり、日本近代史を担当された。京都大学では、全

学委員として歴史的建築物専門委員会委員、附属図書館開発室員等の任につき、また学会活動として史学研究会常務理事等を務められた。

先生の専門は、日本近代史研究で、当初は、近代における朝鮮問題を踏まえた日清戦争開戦過程に関する研究を進め、その成果を『日清戦争への道』として公にされ、学界だけでなく読書界においても高く評価された。近年は幕末・明治維新期の研究に没頭され、緻密な論文を相次いで学会誌に発表され、近年の幕末・維新史研究の深化に大きく貢献されてきた。

(大学院文学研究科)

西 朋太 名誉教授



西 朋太先生は、2月10日逝去された。享年87。

先生は、昭和17年京都帝国大学工学部工業化学科を卒業され、約3年間の軍役後、大学院に復学、昭和21年同大学工学部講師となり、助教授を経て、同32年京都大学工学研究所教授に就任、原子燃料研究部門を担当された。昭和46年改組により原子エネルギー研究所教授に配置換え、同56年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。この間、昭和51年4月から同52年10月まで原子エネルギー研究所長を務められるとともに、京都大学評議員、放射生同位元素等管理委員会委員長をはじめ多くの委員会委員を歴任された。

先生の専門は、電気化学から、原子力工学、放射

化学、核化学にわたり、初期の電気化学研究においては、pH電極の改良、電解コンデンサの改良、乾電池の研究などによって産業界に大きく貢献された。続いて、第五福龍丸の放射能分析に参画して水爆の可能性を示されるとともに、原子力平和利用の重要性に着目して原子燃料および原子核化学の研究を進められ、超ウラン元素の生成、原子核分裂や原子核反応の研究などにおいて多くの業績を挙げられた。一方、研究用原子炉をはじめとする関係研究設備の整備に当初から貢献され、わが国の核化学研究グループの指導者の一人として、後進の育成はもとより、日本原子力学会等関連諸学会の発展に尽力された。退官後においても、国際交流、特に外国人留学生の支援活動に尽力された。

(エネルギー理工学研究所)

桂山 幸典 名誉教授



桂山幸典先生は、2月22日逝去された。享年80。

先生は、昭和22年京都帝国大学農学部農林工学科を卒業後、同学部助手、講師、助教授、工学研究所助教授、原子炉実験所助教授を経て、同39年原子炉実験所教授に任ぜられ、放射線管理研究部門を担当された。昭和62年に退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。この間、昭和54年4月から同57年3月まで、原子炉実験所附属原子炉応用センター長を歴任され、大学の管理運営に貢献された。

先生は、昭和36年8月より原子炉実験所建設計画に参画され、深い学識と優れた指導力を持って建設反対運動に対処されると共に、地元自治体とのパイプ役となり原子炉建設実現に大きく貢献された。

先生の専攻分野は地下水学、放射線防護学であり、未開拓であった放射性トレーサーを用いた地下水流動の研究を推進されると共に、昭和38年当時、発展途上の研究分野であった保健物理学に関する研究も推進された。特に放射線安全研究の成果は、放射線安全管理の指針およびマニュアルとして社会に広く利用されることとなった。また、原子炉を利用した中性子ラジオグラフィーに関する研究においては重要な成果をあげられ、昭和57年には日本非破壊検査協会から奨励賞、同58年には科学技術庁長官賞を受賞されるなど、わが国の放射線安全管理に関わる研究・教育に大きく貢献された。

これら一連の功績により平成16年11月に瑞宝中綬章を受けられた。

(原子炉実験所)

日誌 2006.1.1 ~ 1.31

- | | |
|----------------------|---------------------------------|
| 1月4日 新年名刺交換会 | 18日 経営協議会 |
| 5日 役員会 | 〃 国際交流委員会 |
| 6日 施設整備委員会 | 21日 平成18年度大学入試センター試験
(22日まで) |
| 10日 役員会 | 23日 役員会 |
| 〃 部局長会議 | 〃 博士学位授与式 |
| 11日 放射性同位元素等管理委員会 | 24日 企画委員会 (第16回) |
| 12日 企画委員会 (第15回) | 26日 職員組合との団体交渉 |
| 〃 財務委員会 (第15回) | 27日 入学者選抜方法研究委員会 |
| 〃 核燃料物質の安全管理等に関する講習会 | 30日 役員会 |
| 13日 学生部委員会 | 31日 外国人研究者との交歓会 |
| 16日 役員会 | 〃 企画委員会 (第17回) |
| 17日 教育研究評議会 | |
| 〃 情報環境整備委員会 (第2回) | |

話題

アスベスト問題・京都シンポジウム ～もう一步ふみこんで、知り、学び、考える～の開催

1月17日（火）午後3時から、時計台記念館・百周年記念ホールにおいて、「アスベスト問題・京都シンポジウム」（主催：京都大学環境安全保健機構および環境・安全・衛生委員会）を開催した。

昨年のアスベスト加工工場とその周辺における健康被害の報告を皮切りに、各所でアスベストが社会問題化し、不安感とともに巨大化してきた。本学の施設においても、対策が進められている。本シンポジウムは、そのような事態を受け、本学の一つの社会貢献および社会連携の形として企画したものである。

奇しくも阪神・淡路大震災からちょうど11年目に当たる開催日となり、尾池和夫総長の開会の挨拶でも、地震を切り口に、京都大学のアスベスト対応の背景やシンポジウム開催の意義が明快に述べられた（総長室ホームページ http://www.kyoto-u.ac.jp/uni_int/01_sou/060117_1.htm 参照）。



開会にあたり挨拶する尾池総長

プログラム前半の講演は、以下の通り、学内の研究者4人により行われた。多角的な視点が提供され、情報量の豊富な講演になると同時に、京都大学の事例を含め、具体的な内容が織り込まれ、貴重な情報共有の場となった。

1. 地質学、鉱物学的にみたアスベスト

平島崇男・京都大学理学研究科教授

2. 環境衛生学的知見と国の対応

内山巖雄・京都大学工学研究科教授

3. 臨床医学的知見と京都大学の対応

川村 孝・京都大学保健管理センター所長

4. 飛散抑制と廃棄物に対する工学的知見

酒井伸一・京都大学環境保全センター教授

プログラム後半の総合討論会では、大罵幸一郎・環境安全保健機構長も加わり、会場から寄せられた様々な質問に対して、講演者らが回答や議論を行った。



プログラム後半の総合討論の風景

会場には、学内外から多くの参加者（345名；学生含む学内219名、一般126名）が詰めかけたほか、スペース・コラボレーション・システム（Space Collaboration System；大学・研究機関の間で通信衛星を利用して映像・音声による双方向通信を可能にするネットワークシステム）により全国37ヶ所への同時送信も行われた。

もう一步踏み込んで、知り、学び、考える機会を、多くの方と共有できたのではないかな。

今後も、ホームページ（http://www.kyoto-u.ac.jp/notice/05_event/2005/060117.htm）等を通じて、大学の対応状況や、シンポジウムで寄せられた質問への回答、アンケート結果の公表等、情報発信していく予定である。

医学部附属病院で「きさらぎコンサート」を開催

医学部附属病院では、2月22日（水）に「きさらぎコンサート」を開催した。

このコンサートは、入院患者のみなさまに“憩いのひととき”を楽しんでもらうため、平成7年から職員が企画している手作りのイベントで、今回で11回目を数える恒例の行事となっている。

一山 智副病院長の挨拶で始まり、まず、各地のイベントで活躍中の京大生や京都女子大学生などで結成された学生5人のアカペラサークル「天然水」が登場し、荒井由美さんの「やさしさに包まれたなら」など女性ボーカルの曲目をしっとりとしたハーモニーで披露した。

続いて、ピアノやバイオリン、オーボエを専攻する京都市立芸術大学2回生の4人組、この日のために結成したグループ「STAY」が、NHK連続テレビ小説「あすか」のテーマ曲「風笛」を演奏し、その豊かな音色を外来ホールに響かせた。

患者さんからは「1日中病室にいても退屈なので、今日は本当に楽しませてもらいました。」という声が聞かれた。最後の出演者に対する花束贈呈の際には、参加した約250人の観衆から割れんばかりの拍手が沸き起こった。



外来ホールでのコンサートの様子

京都地域留学生交流推進協議会総会を開催

2月22日（水）に本学が事務局を務め、京都地域の高等教育機関・地方公共団体・経済団体・国際交流関係団体等50余の団体で組織される京都地域留学生交流推進協議会総会が、時計台記念館国際交流ホールで開催された。

第16回目を迎える今回の総会では、本学の北 徹理事（国際交流担当）・副学長が議長を務め、文部科学省高等教育局学生支援課 加藤 敬国際交流企画室長からの文部科学省所管事項の説明の後、平成13年度に開始された「京都地域留学生住宅保証制度」の利用状況や、「第3回外国人留学生のためのジョブフェア・就職ガイダンス」、構成団体の活動状況が報告された。

また、平成18年度の協議会活動について意見が交

わされ、留学生に対する生活支援の充実の検討や外国人留学生のための就職対策を行っていくことが決定された。



留学生支援についての協議の様子

お知らせ

総合博物館特別展

火星の素顔 — Mars Express がとらえた 3 次元画像 —

1. 会 期：3月8日（水）～5月7日（日）
2. 会 場：京都大学総合博物館
3. 主 催：ドイツ航空宇宙研究所
4. 共 催：京都大学総合博物館
5. 協 力：京都大学花山天文台
京都大学大学院理学研究科宇宙物理学教室
大阪・神戸ドイツ連邦共和国総領事館
6. 開 館 時 間：9：30～16：30（入館16：00まで）
7. 休 館 日：月・火（平日・祝日にかかわらず）
8. 観 覧 料：一般400円、大学生・高校生300円、
中学生・小学生200円
70才以上の方、身体障害者の方は無料。
9. 問い合わせ先：京都大学総合博物館

〒606-8501 京都市左京区吉田本町

TEL：075-753-3272 FAX：075-753-3277

HP：<http://www.museum.kyoto-u.ac.jp/indexj.html>

原子炉実験所一般公開

1. 日 時：4月1日（土）10：00～16：00
2. 場 所：京都大学原子炉実験所（大阪府泉南郡熊取町朝代西二丁目）
3. 内 容：ビデオ上映・科学実験体験コーナー 10：00～16：00
施設見学（原子炉棟、廃棄物処理棟）13：00～16：00
4. 申 込 方 法：個人：当日守衛所で受付けます。
団体（10名以上）：団体名、責任者名、連絡先および電話番号を記載した申込書（書式自由）
に見学者名簿を添えて郵送，FAXまたはE-mailでお申し込み下さい。
5. 問い合わせ先：〒590-0494 大阪府泉南郡熊取町朝代西二丁目
京都大学原子炉実験所総務課総務掛
TEL：0724-51-2310 FAX：0724-51-2600
E-mail：soumu@rri.kyoto-u.ac.jp

フィールド科学教育研究センター 上賀茂試験地 春の一般公開 自然観察会

1. 日 時：4月22日（土）9：30～12：00（受付開始 9：00 小雨決行）
2. 場 所：京都大学フィールド科学教育研究センター里域ステーション上賀茂試験地
3. 内 容：2006年度上賀茂試験地春の一般公開自然観察会
試験地内の自然観察（試験地教職員が案内、解説します）
4. 持 ち 物：汚れてもいい服装，歩きやすい靴，雨具
5. 定 員：30名
6. 受 講 料：無料
7. 申 込 方 法：必要事項（氏名・住所・年齢・性別・電話番号）を明記の上，往復はがき・FAX・電子メールのいずれかの方法で申込んでください。なお，申込み1件につき5名までの応募が可能です。その際には，応募者全員の必要事項を必ず明記してください。
8. 申 込 締 切：3月31日（金）当日消印有効。申込みが定員を超えた場合は，抽選とさせていただきます。抽選結果は締切翌週にお知らせします。
9. 問い合わせ先：〒603-8047京都市北区上賀茂本山2 フィールド科学教育研究センター上賀茂試験地
TEL：075-781-2404 FAX：075-723-1262
E-mail：kamigamo@kais.kyoto-u.ac.jp
詳細は，フィールド科学教育研究センターホームページをご覧ください。
<http://fserc.kais.kyoto-u.ac.jp/kami/news.html>

編集後記

「大規模化した大学において，特に近年のように事態が痛感されるのは，現在大学において生起している情報の不足であります。それは，いうまでもなく，大学における各人が的確で迅速な情報を得てそれぞれの場での状況把握，問題点の認識や判断をすることを期待するからであります。－中略－広報活動というものは『言うは易く行なうは難し』の点があり，従来からその必要性について各方面から指摘を受けながら今日までその実現が遅れていた訳であります，当面事実の報道ということに編集の方針をしばって発行していくことになっております。」

（1969.5.20付，NO.1 京大広報の発刊にあたって 奥田 東 元京都大学総長の記事抜粋。）

今求められている広報戦略は，本紙創刊当初から指摘されているところがあります。法人化後の事務改革のなか，キャンパスに新たな春を迎えるところですが，さらに，当時はなかったホームページでの迅速性やコストパフォーマンス等に配慮した工夫と改善が広報活動に求められています。